



“An Atlas of Examination, Standard Measurements and Diagnosis in Orthopedics and Traumatology”

Edited by Otto Russe

従来から、リハビリテーション領域において、評価、測定的重要性は強調されて来た。しかし、リハビリテーションの領域特有な評価、測定はまだ多くはない。また一方ではそれ等の測定値、測定方法が、他の分野で確立されており、これを正しく理解し、用いることも大切になって来る。

この本はその意味で、リハに最も関係の深い筋、神経及び骨格系に関する基本的な診断法、計測法、標準値を知るのに大変便利な本である。

まず、四肢、脊椎に関する解剖学用語が、ラテン語と英語で、明瞭な図に説明されている章に始まる。

次の章は、国際的標準整形外科学計測法及び、X-ray計測法と題されている。すなわち、関節可動域の測定から、レ線写真による計測までも含んでいる。この中では、変形に対する正しい計測の方法、レ線写真での計測等は、整形外科医だけのものではなく、理学療法や作業療法

に携われる人達にとっても、大切な知識ではなからうか。

第3章以下は、神経学的検査法、血管障害のテストとつづいている。これ等の章では、沢山のテストが、順序良く、明瞭な写真と共に配列されている。特にまとめとして、あげられている筋の神経支配と筋の動作についての表は役に立つものである。

更に、整形外科的診断法、歯の Terminology から、主要な検査の標準値から、略語辞典までつづいている。

一口に言えば、筋骨格系及び神経系の検査診断、計測の辞書であろうか。ともすれば、日常の臨床での正しい検査が、慣れと共に便法になりがちなのは、筆者のみではないと思われる。各人が、持つべき本ではないが、どのようなリハの部門においても、一冊は備えて、必要に応じて、参考にするには大変便利な本である。

(Hans Huber Publisher, Bern, 1972)

(横浜市大リハビリテーション科 大川嗣雄)

“Sensory Integration and Learning Disorders”

by A. Jean Ayres, Ph.D.

本書は著者の長年の臨床経験及び多数の論文の大成であり、学習障害児に対する治療法として neurobehavioral theory (神経行動学説) という実用的な仮説を提唱している。全体は17章よりなるが、1章から6章までの脳機能概論と、7章から17章までの学説の実践面の2部に大きく分けることができる。

学習障害の基本的な考え方として、大脳皮質障害だけを問題とする態度をとらず、学習発達における個体発生、系統発生の要因を考慮して、脳幹または中脳の障害をも疑わなければならないとしている。又中枢神経系における情報処理として、種々の受容器から多くの感覚入力と同時に脊髄から大脳皮質までの各レベルに入り、各レベル間で相互に作用しあい、入力の影響を調節するインパルスを送っているという感覚統合理論を展開している。

統計に基づいて、学習障害に関連する症候群として次の五つをあげ、一つの仮説を述べている。(1) 姿勢・眼

球・左右統合の障害、(2) 失行症、(3) 形状・空間知覚の障害、(4) 聴覚・言語障害、(5) 触覚障害そして半側無視という仮説である。

評価として紹介してあるのは、著名な感覚統合検査(SCSIT)、姿勢反射検査、筋緊張状態、外筋筋の調節、前庭機能、身体の左右各機能の統合、舞踏病様アテロゼ運動等である。

治療に際して刺激するものとして、前庭感覚、触覚、固有感覚をあげ、さらに聴覚、嗅覚、視覚をもつけ加えている。そして非常に具体的な提案を多数行っている(マット、網製ハンモック、スクーター板、大きな球、平衡板等の利用方法とその理論も含んでいる)。

感覚統合障害のある子供及び成人の中枢神経系障害の治療に対して特別の興味を抱いている理学・作業療法士に本書を勧めたい。

1972, 294 pp., illus., \$12.50. Western Psychological Services, 12031 Wilshire Boulevard, Los Angeles, California 90025 (聖母整肢園、理学療法士 今川忠男)